

寄稿

愛別町「きのこの里」と 外国人技能実習生 —共生社会の構築に向けて—



天野 思歩 (あまの しほ)

北海道教育大学函館校 教育学部 国際地域学科 地域協働専攻国際協働グループ

2000年北海道名寄市生まれ。2000年から2009年までの9年間は愛別町で育つ。2023年3月北海道教育大学函館校地域協働専攻国際協働グループ(卒業見込み)。

はじめに

愛別町では、特産品であるきのこの生産が盛んに行われ、北海道の生産量の4分の3を占める「きのこの里」として知られています。「なめこ、えのきたけ、舞茸、椎茸、えぞゆきのした」の5種類のきのこが生産されており、大手メーカー産に比べて、肉厚で風味が優れていると好評で、道内のスーパーには愛別産のきのこが並べられています(写真1)。



写真1 愛別産きのこの一部(2021年11月筆者撮影)

しかし、少子高齢化や都市部への若年層の流出により、愛別町の人口はこの21年間に45%も減少し、地域産業の担い手不足が問題視されています。このような状況の中で、きのこ生産を支えているのが外国人技能実習生です。したがって、技能実習生を労働者としてだけでなく、生活者として受入れていく必要があります。そのためには、彼女らとの共生が求められ、その道を探ることにしました。

1 きのこと生産の契機は米の生産調整

愛別町におけるきのこ生産のきっかけは、米の生産調整でした。全国的に米が過剰となり、稲作を主体としていた愛別町でも生産調整が行われ、水稲の代わりとなる補完作物を探しましたが、そこで採用されたのがきのこでした。1970年には愛別町の代表2人がきのこ生産の盛んな長野県に出向き、その生産技術を持ち帰りました。きのこを選んだ理由は、愛別町が長野県の気候と似ていたからです。

持ち帰ったきのこ生産技術を活かし、農家2戸からきのこの栽培が始まりました。その後、次々と生産農家が増え、1972年には持ち帰った技術を利用し、えのきたけの大規模なきのこの生産施設が建設されました。2年後の1974年には、第2次農業構造改善事業や林業構造改善事業などにより生産施設が建設されました。「きのこ」が補助事業として採用されたのは愛別町が初めてでした。

1979年には「愛別町えのきたけ生産組合」が、その後は「愛別町きのこ生産連合会」も設立されました。愛別町役場と旧愛別農協*はきのこ担当者を置き、次第に町をあげての産業となりました。当初はえのきたけだけでしたが、1980年にはなめこ舞茸、1985年には原木椎茸の栽培が開始されました。

しかし、その後、伊達市、苫小牧市、三笠市などがきのこ生産に参入したため、供給過剰に陥ることになりました。1993年には、きのこ生産量、販売額とも最高となりましたが、再び販売価格は低下し、愛別町のきのこ生産は厳しい状況におかれました。

そこで、コスト削減と品質と生産量の安定化のため「培養センター」が整備されました。また、法人化して、培養から包装作業までを一貫して行う動きが出てきました。1996年には、コスト削減と価格形成力の強化のため、後述する「農事組合法人ヒット」が設立されました(写真2)。



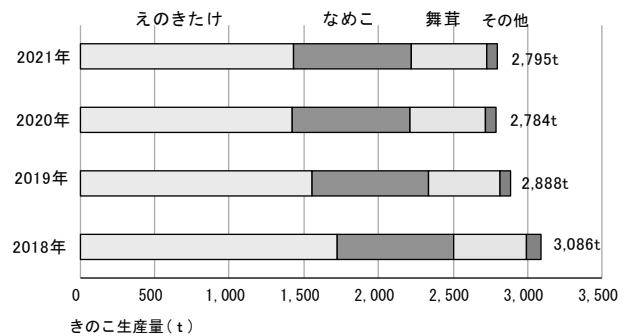
写真2 農事組合法人ヒット全景(2021年11月筆者撮影)

* 2008年に愛別農業協同組合と上川農業協同組合が合併して上川中央農業協同組合となった。

2 新型コロナ禍によりきのこ生産が減少

愛別町でのきのこ生産量は、様々な課題を抱えながらも増加し続け、現在では、4法人(構成農家13戸)と2個人農家、2企業で年に約5千tのきのこを生産し、約20億円を生み出しています。

しかし、最近は減少傾向にあります。愛別町で最も規模の大きい「農事組合法人ヒット」の直近4年間の生産量の変化をみると(図1)、えのきたけの生産量を維持できず、減少傾向にあります。



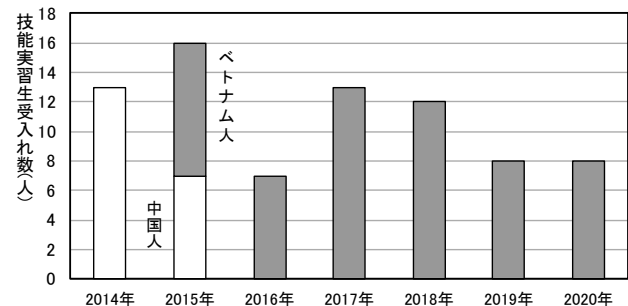
出典:社内資料から筆者作成

図1 農事組合法人ヒットにおける直近4年間のきのこ生産量

ヒットによれば、新型コロナ禍により技能実習生が入国できなかったことが、その最大の要因だと指摘しています。

きのこ生産を支えてきたのは技能実習生ですが、2019年から流行しはじめた新型コロナの影響により、技能実習生受入れが厳しく規制されました。愛別町でも技能実習生は帰国するばかりで、新規受入れができなくなりました。現在は受入れが再開されていますが、必要なだけ確保できていません。

ヒットにおいても同様で(図2)、生産に大きな影響を与えています。なお、2016年の技能実習生の大幅減は、中国からの受入れを止めたためです。



出典:ヒット社内資料から筆者作成

図2 農事組合法人ヒットの技能実習生受入れ数の変化

3 技能実習生の日常生活と待遇

愛別町では、きのこ生産は重要な産業となっており、生産量を維持する上で底辺で支える技能実習生の確保が極めて重要です。そのためには、彼女らが快適に暮らせる条件づくりが求められ、まずは、技能実習生の日常を知る必要があります。ここでは、愛別町で最も多く技能実習生を受入れているヒットでの調査からみてみます。

技能実習生は、休日や1日の労働時間に違いがあるシフト制がとられていますが、全員が同じ労働時間と休日数になっています。また、滞在期間が長い技能実習生と経験が浅い技能実習生とのペアを作り、仕事を円滑に行えるようにしています。平均の労働時間は1日8時間です。繁忙期の冬季は月40時間ほどの残業があり、手取りで約20万円の給料が支給され、夏季には残業がなく、手取りで約10万円です。難しい作業は機械化され、簡単な作業を人の手でやっているため、技能実習生は、えのきたけの収穫作業や紙巻き、包装などの単純作業に従事しています（写真3）。



写真3 紙巻作業を行う技能実習生（2022年10月筆者撮影）

住居は、以前は1つの住宅での共同生活や2人1部屋でアパートに住んでいましたが、現在では1人1部屋が与えられています。通勤は、以前は徒歩や自転車で出勤していましたが、交通ルールが守られないため社員が技能実習生を送迎しています。

食生活は、以前は、高価な肉や魚は避け、安価な野

菜を主体とし、畑で野菜を栽培して食費を切り詰めていました。しかし、現在ではスーパーで良質米を購入しているなど、大きく変わっています。

日本語力については、母国の大学を卒業している人材が多く、来日前に日本語の学習も行われていることから、多くは日常生活には困らないようです。しかし、仕事面では理解できないことも多く、日本語レベルに大きな差があります。中には独自に日本語の学習をしている人もいます。

地域住民との関わりでは、新型コロナ流行前には、「きのこの里フェスティバル」にスタッフとして参加し商品を販売したり、お祭りや運動会などに参加するなど交流機会が設けられていました。しかし、新型コロナの流行によりこれらのイベントはすべて中止され、地域住民と交流する機会は全くなくなっています。近所の住民と交流をしている技能実習生はまれで、ほとんど近所づきあいはありません。

4 受入れ企業の技能実習生への支援

「きのこの里」の命運を握る技能実習生の確保のためには、技能実習生の日本語教育や日常生活を支える施策、すなわち「共生政策」の充実が求められます。

ヒットでは、職員やその家族が様々な支援を行っています。例えば、職員による送迎や、病院への付添、1か月に2回ほどの社用バスでの買物などです。さらに、職員の家族が手料理を振舞ったり、衣服の提供など様々な面で技能実習生を助けています。仕事に加え日常生活での世話は企業にとって相当な負担ですが、きのこ産業を守るために、技能実習生を大切な存在として扱っていると感じました。

5 愛別町と上川中央農協による支援

きのこ産業を維持するために不可欠な技能実習生に対して、愛別町が行っている支援策はほとんどないのが実態です。町内にある「EUC北海道講習センター」でのカリキュラムの一部として、ごみの分別講習や、

ヒットに対する施設の貸付などをしてはいますが、技能実習生への直接的な支援はありません。愛別町が、支援を行わない理由として、職員不足があげられ、支援に手が回らないのです。また、農家や企業が必要とする具体的な支援の把握が難しいことが、支援に踏み切れない理由でもあります。

新型コロナ禍以前には、「きのこの里フェスティバル」や夏祭りなどで町民と触れ合う機会を設けていましたが、イベントも中止が相次ぎ、町民との交流機会はなくなっています。

これは農協にも同じことが言えます。かつては技能実習生の受入れの仲介役となっていた旧愛別農協ですが、現在は受入れ企業にも、技能実習生にも一切支援を行っていません。組合員から要望があれば対応を考えるとしていますが、どのような具体的な案が考えられているか明確ではありません。

農協の支援を難しくしている要因には、農協合併があると考えられます。合併前は、積極的に支援していた旧愛別農協(孔;2010)ですが、合併により旧上川農協が管轄区域となったため、共通した支援がやりにくくなったのです。

6 共生社会の構築に向けて

新型コロナ禍により技能実習生の受入れができず、きのこ生産量が減少したことを受けて、技能実習生の重要性を再認識したはずですが、これからは、技能実習生に選ばれる地域となれるよう行動を起こす必要があると考えます。

ヒットでは、職員とその家族が一体となって支援していますが、受入れ企業だけに委ねることはできません。地域産業を守るのが行政や農協の役割であり、技能実習生を地域として受入れるという認識を持つ必要があります。

日本の習慣や食文化などを技能実習生に教えることは当然ですが、従業員やその家族に、相手の習慣や文化、「やさしい日本語」を教えることも必要です。また、

日本語教育も重要です。これらは、受入れ農家や企業だけでできるものではありません。地域に不可欠な技能実習生であれば、行政や農協などが分担して積極的に支援すべきではないでしょうか。

おわりに

「きのこの里」として知られている愛別町ですが、技能実習生によってきのこ生産が成り立っていることがわかります。コロナ禍で、技能実習生の新規受入れができなくなったことによって、改めて技能実習生の存在が愛別町のきのこ産業にとって重要であることが明確となりました。その一方で、愛別町や農協による支援がありません。しかし、これは決して町や農協だけの責任ではありません。国の経済的、人的な支援不足が根本にあると考えられるからです。

地域の産業を守っていくのは地方自治体や企業の責務だけでなく、国の責務であり、私たち国民の責務でもあります。愛別町の技能実習生をめぐる多くの課題は、「小さな町の小さな課題」ではなく、私たち国民一人ひとりに突き付けられた課題なのかもしれません。

最後に、現地調査にご協力いただいた農事組合法人ヒット、愛別町、上川中央農協の皆様にも、また、『開発こうほう』に掲載の機会をいただいた北海道開発協会にも感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・ 愛別町ホームページ
<http://www.town.aibetsu.hokkaido.jp/aibetsu/industry1/index.html>(2022年6月15日検索)
- ・ 株式会社bヒット
<https://www.hokkaido-hit.jp/>(2022年6月15日検索)
- ・ 孔麗(2010)「外国人に依存する農業—北海道の中国人研修生・実習生の役割」、加藤 剛編『もっと知ろう! わたしたちの隣人 — ニューカマー外国人と日本社会』第3章所収、世界思想社、pp97-121